

今週の為替相場見通し(2020年7月13日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		106.64 ~ 107.79	106.91	106.00 ~ 108.00
ユーロ	(ドル)		1.1245 ~ 1.1371	1.1299	1.1180 ~ 1.1380
(1ユーロ=)	(円)		120.31 ~ 121.96	120.78	119.00 ~ 122.50
英ポンド	(ドル)		1.2463 ~ 1.2668	1.2620	1.2550 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	133.91 ~ 135.92	134.97	134.00 ~ 136.50
豪ドル	(ドル)		0.6924 ~ 0.7001	0.6951	0.6850 ~ 0.7050
(1豪ドル=)	(円)	*	73.98 ~ 75.16	74.30	73.80 ~ 75.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 松本 奈保輝

(1)今週の予想レンジ: 106.00 ~ 108.00 円

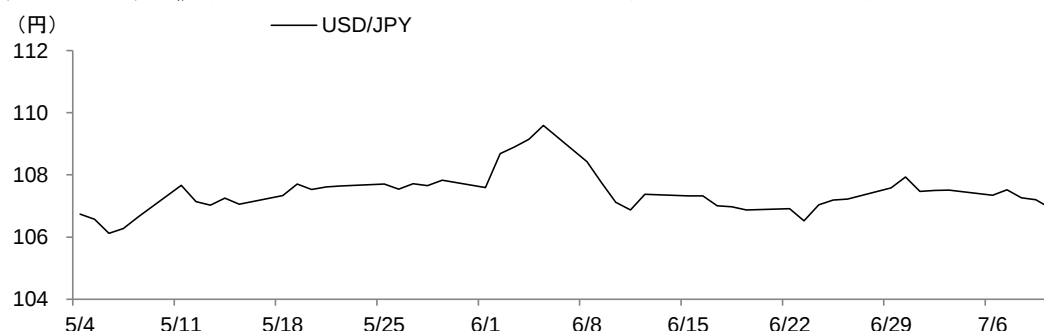
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

今週のドル/円相場は週後半にかけて下落する展開。週初6日、107円台半ばでオープンしたドル/円は、日経平均株価が上げ幅を拓く中で底堅く推移。その後、米国での新型コロナウイルス感染者数の増加が意識されてじり安の展開となるが、米6月ISM非製造業景気指数が予想を上回る結果となると107円半ばに戻す局面はあった。しかし、再び下落し結局107円台前半での推移が続いた。7日は、軟調に推移する日経平均株価を横目に上値の重い推移。海外時間には、欧州株式市場が軟調に推移する動きにドル買いが強まり、一時週高値の107.79円まで上昇した。その後は主要な米経済指標の発表が予定されていない中、107円台半ばでの狭い値動きとなった。8日は、日経平均株価の下落が続いたことが嫌気され、ドル/円はじりりと値を下げる展開。その後は米国でテクノロジー株中心に株式市場が上昇し、金も初の1800ドル台へ乗せる中、ドル売りが更に強まり、107円台前半まで下落した。9日は、新型コロナウイルスの感染拡大リスクが重しとなり上値の重い展開。後半にかけては、米株式市場が軟調に推移した中で、107円台前半まで下落した。10日は、米国での新型コロナウイルス感染者数が引き続き増加していることから逃避として米長期債買いが強まり、米金利低下を受けドル売りが強まる中、リスク志向のドル売りが優勢となり、一時週安値の106.64円まで下落する。その後はトランプ大統領が現時点での第2段階の米中貿易合意の可能性が低いとの見解を示し、ドルが買い戻される展開に、ドル/円は下げ渋る。その後は、週末を控え106.90円付近での閑散な推移が続き、106.91円で越週した。

今週のドル円相場は上値が重い展開を予想。米国ではフロリダ、テキサス州などでコロナウイルスの2次感染の拡大が進んでおり、段階的な活動再開の停止等、経済回復の遅れが懸念されている。かかる中、多くの米経済指標が発表されるため、市場予想比下振れした場合の方がドル売りで反応が大きくなりそうで、106-108円のレンジ推移を中心としつつも、106円方向への下値リスクを警戒する展開となりそうだ。重要イベント・指標としては14日(火)に米6月消費者物価指数、15日(水)に日銀金融政策決定会合、米ベージュブック公表、米7月NY連銀製造業景況指数、米6月鉱工業生産、16日(木)にECB政策理事会、米6月小売売上高、米7月ミシガン大学消費者マインド指数の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/6~7/10)の値動き: 安値 106.64 円 高値 107.79 円 終値 106.91 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1180 ~ 1.1380 119.00 ~ 122.50 円

(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは約1か月ぶりの高値を更新した。週初、6日にユーロ/ドルは1.1250、ユーロ/円は121円ちょうどで取引を開始した。中国紙が今後株式市場が強気相場に入るとの記事を出したとの報道を受け中国株が上昇。さらに6日に発表された米6月ISM非製造業景気指数が57.1と予想以上に強い結果となったことを受け、リスク選好の動きとなりユーロ買いが進んだ。ユーロ/ドルは1.13台半ばまで上昇。ユーロ/円も121.96円まで上昇し、週高値を付けた。翌7日には、発表された独5月鉱工業生産の結果が予想を下回り、さらに欧州委員会が今年の成長率を1.0ポイント下方修正し、-8.7%との予想を発表したことで一時ユーロ売りに転じた。ただし、8日、9日と上海株などが上昇を続けたことで再びリスク選好の動きからユーロは買い戻され、ユーロ圏財務相会合でEUがコロナ復興基金構造について合意に近づくとの見方がユーロを支え、9日には約1か月ぶりに1.1371ドルまでユーロ高が進んだ。しかし、復興基金は補助金ではなく、返済義務のある融資で行われるべきと主張する4か国が譲歩する可能性を伝える報道はなく、翌10日にユーロ/ドルは1.12ドル台、ユーロ/円は120円台前半まで一時下落。米国市場で新型コロナウイルスワクチンを巡る期待からリスク選好が上向くと、ユーロ/ドルは1.13ドルちょうど近辺、ユーロ/円は120円台後半で越週した。

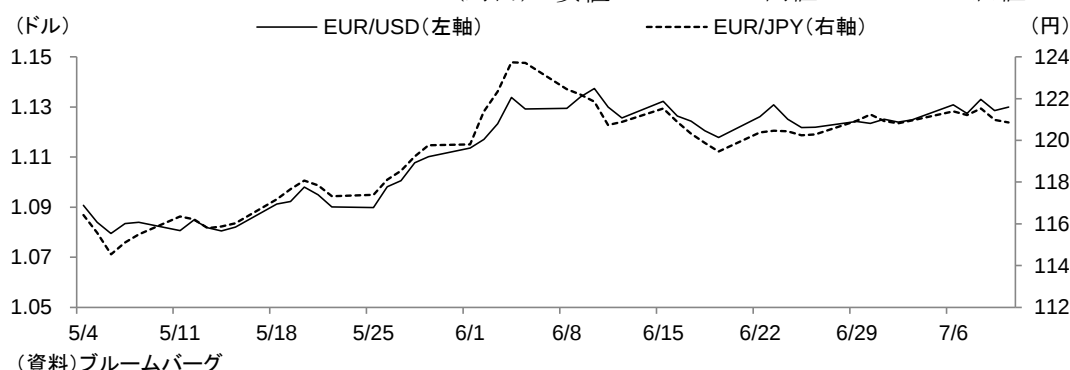
今週は16日(木)にECB政策理事会、さらに17日(金)からEU首脳会議が予定されている。ECBは6月の理事会で、3月に導入したパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)について従来の7500億ユーロから1兆3500億ユーロに大きく拡大した。さらに、期間も従来の年内いっぱいから来年6月までと半年延長し、規模・期間両面で拡大した。ラガルドECB総裁は今回の理事会は前回の追加緩和を評価する場となるとの発言もしており、金融政策を現状維持で据え置くと予想する。そのため、相場へのインパクトは限定的と予想する。ECB首脳会議は注目材料であり、EU復興基金が主要議題となる。ドイツは早急の合意を望んでいるが、反対するオランダ、オーストリア、デンマーク、スウェーデン等の4か国はもちろん、他の加盟国首脳からも可能性は低いと悲観的な見方が伝えられている。全会一致原則がある以上、4か国としてこのタイミングで合意する必要もなく、進展がない場合はユーロ売り優勢となる。一方、サプライズで合意に向かえばユーロは大きく買われるだろう。また、市場のリスク要因は依然として新型コロナウイルスであり、感染拡大が加速している米国などが再度経済封鎖策などを講じるか否かに注目が集まっている。先週、上海株が8日連続上昇、ナスダック総合指数も連日高値を更新するリスク選好モードとなった。感染者拡大を受け、リスクオフに転じるとユーロは売り優勢の展開となるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/6~7/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1245 高値 1.1371 終値 1.1299

(対円) 安値 120.31 高値 121.96 終値 120.78



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2550 ~ 1.2800 134.00 ~ 136.50 円

(2) ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、目ぼしい材料のない中、小幅上昇。週明け6日、手掛かりを欠いた横這いで滑り出したポンドは、7日になって主要通貨に対し全面高に振れた。同日のアジア時間、堅調推移を続けた中国株は、引け際になって失速したが、欧州の株式市場は、この失速を引き継いで朝から軒並み下押しした。実のところポンドも、欧州時間朝方は、株安を嫌ってか、ユーロと並んで軟調推移を見せた。その後のポンド上昇に最も貢献したのは、対ユーロでの0.90抜けというテクニカルな要因と思われた。同水準は、5月半ばから6月半ばまではポンドの底値を形成し、6月半ばに底割れしてからこの日(7日)の上抜けまでは、天井を形成してきた、所謂「ピボット」水準。ユーロと並んで軟調推移が先行したポンドだったが、対ユーロでの0.90抜けを視野に入れて、俄かに独歩高に転じた。同日夜予定された、英離脱後の将来関係を巡る英、EUそれぞれの首席交渉官同士の会談や、翌8日に予定されたスナク英財務相による経済刺激策(コロナ対策第2弾)発表を、市場が神経質に待ち構えていたことも、こうしたテクニカルな値動きに弾みをつけたものと考えられた。結局、将来関係交渉からは目ぼしい話題は提供されなかったが、経済刺激策は、最大300億ポンド規模の追加財政投入策が示された。その後ポンドが対ドルで水準を切り上げたところを見ると、市場も、この景気刺激策を好感したようにも思われた。翌9日もポンドの堅調は続き、対ドルで1.2668、対円で135.91と、それぞれこの間の高値をつけた。その後は、しかし、対ドルでは横這い、対円では下押し、対ユーロではじり高と方向感の定まらない値動きを見せ、週の取引を終えた。

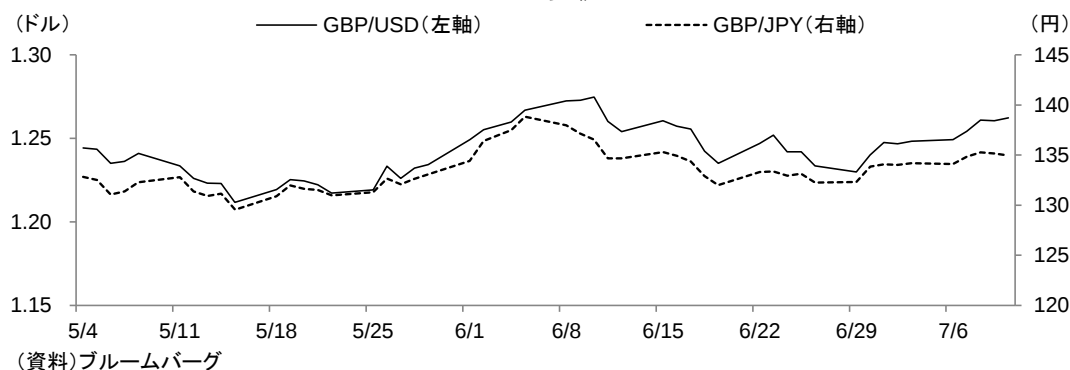
今週の英ポンド相場は、堅調気味の横這いを予想。ポンドに強気になれるような材料は見当たらないものの、対ユーロで0.90を上抜けたことで、少なくとも目先はポンドの上昇余地を探る可能性が高いものと見込む。先週の金融市場では、中国株(上海総合指数)の急騰(6日)や金価格の1800ドル/トロイオンス乗せ(8日)などが目を引いたが、並行して、一時下振れした米株や原油価格も、結局高値で引けた。本来であれば、株高と金高とは、必ずしも相容れないもののはずだが、こうした「全面高」が物語るのは、「金余り」ではなかろうか。取りも直さず、その供給減は、コロナ対策の名の下に各国中銀が供給する過剰流動性であろう。この間、通貨市場を含む、資産市場に蔓延しているのは、「金余り」を背景とした、動いたものに飛びつくだけの、「深い配慮のない」投資のように思われる。仮に、投資市場全般が、「頭を欠いたニワトリ」のように右往左往を繰り返すだけならば、上述のようなテクニカル要因が幅を利かせたり、「コロナ感染第2波懸念」という都合の良い言い訳がある国の通貨=ドルが売られ易い状況が長引いたりするのも、妥当な予想のように思われる。英経済指標では、14日(火)に英5月(月次)GDP、英5月製造業/鉱工業生産、英5月貿易収支、15日(水)に英6月CPI、16日(木)に英6月失業率(社会保険受給ベース)などの発表が相次ぐが、市場の関心が高いとは言えない。英のロックダウン(外出制限/操業制限)は7月3日まで厳格に実施されており、6月以前の数字が悪いのは当然と考えられるからだ。ただし、トルコやポーランドなどでは、食品価格や燃料価格の上振れを要因に、既に予想外の物価上振れが観察されており、万が一、英物価が予想を上振れるようなことがあれば、英中銀の積極的な金融緩和策との齟齬を嫌って、ポンドには悪材料と読まれよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/6~7/10)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2463 高値 1.2668 終値 1.2620

(対円) 安値 133.91 高値 135.92 終値 134.97



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6850 ~ 0.7050 73.80 ~ 75.50 円

(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、6日(月)、週末に伝わった中国が財政政策を強化するとの報道に上海株が上昇反応し、リスク選好ムードの中、豪ドルはシドニー朝からロンドン入りにかけて0.6930→0.6980まで上昇。NY時間も0.69台後半で推移した。中国が香港統制をする「国家安全維持法」施行に関しては、令状なしでの捜査が可能と決定された。この他捜査対象者の移動の自由制限や、“国家の安全に危害を加える恐れがある”インターネット情報へのアクセス制限、資産凍結等の細則が制定された。7日(火)は0.70手前まで上昇も中国株が上げ幅を縮小する中、短期勢による豪ドル利益確定の売りが相次ぎ0.69半ばまで下落。豪ドル/円は75.06円近辺から74.75円まで下落。RBA金融政策金利発表直前には若干の豪ドル売りが見られたものの、金利0.25%据え置きノーサプライズで声明文発表後しばらく0.69台半ばで推移。海外時間では新型コロナウイルス感染第二波懸念と隔離措置による経済再稼働の遅延懸念から株価が下落する中、メルボルンの6週間都市封鎖措置も豪ドルの重しとなりロンドン時間には0.6924まで下落した。NY時間では米株が下げる中、ドル売りも優勢となり、豪ドルは切り返し0.6980近辺まで戻した。その後は0.69台半ばで推移。8日(水)シドニー時間の豪ドルは0.6928-0.6950のタイトレンジで推移し、NY時間にハイテク株を中心に株価が上昇し、またドル売りが加速すると、豪ドルも0.6980半ばまで上昇。マーケットの取引材料は前日と特段変わっておらず一日を通して0.6928-0.6986のナローレンジでの推移となった。9日(木)アジア時間は発表された中国6月PPI前年同月比で-3.0%とやや持ち直し、CPIも2.5%とやや上昇したものの、足元の流動的な状況から、豪ドルは特段の反応なし。ロンドン時間では0.70に一瞬到達もセンチメントが軟化する中、即0.69台後半へと戻した。NY時間では新型コロナウイルス感染拡大が深刻化する中、人員削減を準備する大企業が増えており、経済回復を遅延させるとの見方から株式は反落した。リスク回避が優勢となり、豪ドルも軟調に推移し、NY引けは0.6960の半ば。世界各地で再度感染拡大後の新規患者数が過去最多を記録したことなどがセンチメントの重しとなった。10日(金)、豪ドルは引き続き0.69-0.70レンジでの推移となった。豪VIC州財務局が「ロックダウンで州の失業率は11%まで上昇し、GDPは14%減少を見込む」と発表した事や、同州で新型コロナウイルスの感染急増で対応能力が限界に近づいている為、モリソン首相は帰国者の数を一段と制限するとした事が豪ドルの重しとなった。新型コロナウイルス感染拡大が続きセンチメントが悪化する中、アジア時間は下落を続け、0.6924まで下げたものの海外時間では0.6950を挟んでの振幅となった。

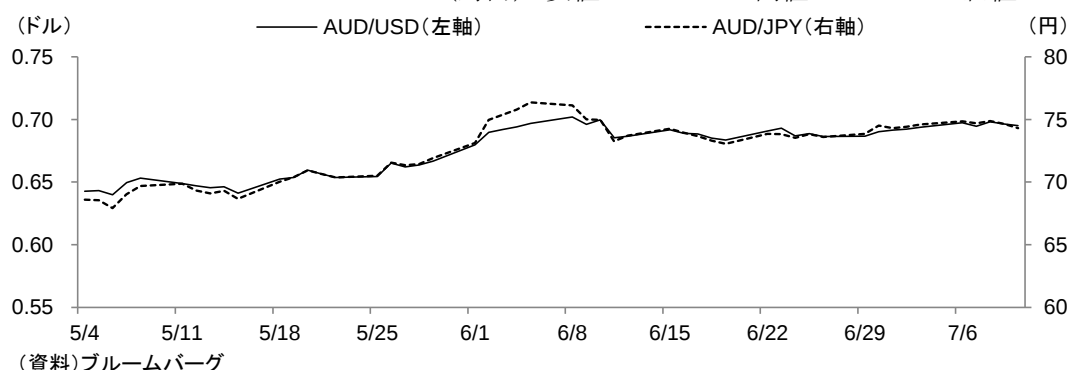
今週は木曜に中国2QのGDPの他、中国6月小売売上、豪6月雇用統計が予定されている。豪雇用統計の市場予想は雇用者数減少はピークを迎えるとみられている一方で失業率は若干の悪化となっている。揉み合いのまま、0.69-0.70のレンジを中心に引き続き推移するとみる。足許では新型コロナウイルス感染第二波の他、9日にあったような駐豪中国大使館による「豪州の香港と内政干渉を直ちにやめるべき」と主張する、「豪政府の香港に関する事実無根の言いがかりは遺憾に思う」などの牽制発言などにも引き続き注意し、豪中関係を見守りたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/6~7/10)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6924 高値 0.7001 終値 0.6951

(対円) 安値 73.98 高値 75.16 終値 74.30



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。